

一九五六年（四六歳）

一月一日

今年の希望と方針

医師としては、大清水に精神病棟を増築すること。精神薄弱児の収容施設をつくること。これは人に先をとらなければならない。

一九五七年（四七歳）

一月一日

並んで力を注いでみたいのは精薄施設をつくることである。この仕事は、私の夢であると同時に、ショウに対する愛情の発現でもある。困難ではあるがやりとげてみる。

一九五八年（四八歳）

一月一日

医師としての立場と活動を次第に文学をみつめ小説を書く方向に向けてゆきたい。生活の費は医師としての仕事から、生きてゆく価値は文学にもとめるといふ具合に。病院のことであるが、これは思い切ってみんなに任せたい。事情が許したら協同組合の理事長はやめ、精神分裂病の追求に専念したい。高血圧と脳波の関係も勉強したい。

一月四日

九時に出勤す。宮本理事は理事室の掃除と青銀の村田貸付課長の応対に懸命である。湯も湧いていない。事務室では今井理事、岩渕書記も出ていない。足をつく間もない。診療室には須藤先生、国兼先生も出ていない。そして私の机にはインクも入っていない。聴診器もない、診断用の電灯もハンマーもない。便所に行ってみると便所は凍っていまにも滑り転びそうである。九時半三上専務はドテラ姿で理事室におりて来る。十時木村理事はゆうゆうと出勤してくる。

これが一九五八年初頭の健生病院である。この事態は理事会でも討議しなければなるまい。

二月十九日

キャバレー美人座のダンサー発狂して、山下町に捕物劇を展開する。

三月十五日

十一時半から、保健所の小笠原さんとともに私宅監置の〇〇さんを鑑定にゆく。

七月十四日

大清水を久々に回診する。堀籠先生はカルテにあまり書いてない。このことは充分話し合わねばならない。野辺地の〇〇という患者にロボットミ手術を実施する。

八月二十日

腕を出すと、ひやりとするようになった。みょうが出廻り、そしてうまい。診療が終わると、やることもなく、病院内をさまよい歩く。このくせはやめなければならない。

九月十三日

夜、病院の経営分析会議をやる。開いた理由、最近のゆきづまりを検討するため。検討の結果議論になったこと。収入をあげるためには、大清水のベッドが満杯でないことをとりあげる。患者はあるのにベッドが空いている。機構をなおす。役職員の気持ちをその気にさせる。診療の内容を充実させる。精神病棟でインシュリン衝撃療法が少ない。これをどうするかについて話し合った。看護婦と看護人が足りない。全員がその気になっていないことなどであった。

十月七日

病院金融のことで相互銀行、青森銀行にゆく。

夜久し振りに、読まず、書かず、考えずにしゃべり遊ぶ。

太宰の年譜を読む。昭和二十年十一月二十五日、みぞれの降る日のこと、弘前笹森町の当時の私の家で開かれた日本共産党青森県委員会の組織準備会に太宰も出席していたことが落ちている。当日の出席者は、杉浦茂、唐牛進、原克、内山勇、山鹿守一に小生だったと思う。あるいは田村文雄、石岡彦一、雨森卓三郎も参加していたかとも思う。席上、新しく組織される共産党とソ同盟共産党との関係について論議され、国際的連帯性を強調する意見が場内を支配し終ったとき、太宰は誰にも何とも挨拶しないで出てしまった。

この会合を組織してそして呼びかけたのは私であったが、私は太宰に連絡したおぼえはなかった。太宰が誰からこの会合を知ってやってきたかについては今でも分らない。

太宰の年譜をよんで第二に思い出されるのは、昭和十二年のことである。転向した私が再び東大に帰り医学部三年のときであった。私たちは「ちがる会」によく集まった。昭和三年四年五年頃弘前高等学校で赤い学生として動いた人たちのうちで東京にでた人たちは、ひきつづいて何等かの形で日本共産党の活動をつづけたが、昭和七年に日本の満州攻略が始まり、昭和十二年には中国侵入が始まるというので、左翼勢力の後退萎縮期であり、投獄せられた共産党員には転向者が多く、私たちの活動は手足をもがれていた。弘前高等学校出身在京の転向者たちは、「つがる」に学んだことに因んで、「つが

る」ではなく、「ちがる」会をつくって互に集まり、昔を語り合うことによって僅かに革命的情熱を満足せしめていたのであった。秋田の伊藤君、茨城県の広瀬君たちが中心であり、太宰も私も時には顔を出した。そのときの太宰はへこ帯をしめており、懐旧談から論議になると、ふいっと姿を消してゆくのであった。

十二月十六日

入院患者〇〇さん、ロボットミー後の経過悪く、状態悪し。